

博士論文執筆経験談

平成19年3月修了生

元：自然系教育講座所属 現：法政大学等非常勤講師 **田 艶**

私は5年がかりで博士課程を修了しました。修了して8年になります。8年も経ちますと、多くの記憶が曖昧になります。この執筆経験談の話が来たときは、かなり迷いましたが、順調ではなく、色々と苦労しながら学位を取得したことが皆さまに少しでも参考になればと思ひまして、お引き受けすることにしました。

博士課程の5年間

博士課程の一年目は、ほぼゼロからのスタートでした。修士課程とは研究テーマがかわったため、実験装置を組み立てたり、大量の論文を読み込んだりする必要がありました。2～3か月で本格的に実験を始める予定でしたが、自分が妊娠していることに気付きました。計画通りにいかないことは覚悟で、研究を続けることにしました。そして、出産までは胎児に影響のない内容を選んで進めました。

二年目になると、出産したばかりの子供を母に預けて、本格的に研究に取り組みました。それからは、実験室漬けの日々でした。遅れを取り戻そうと、朝早くから夜遅くまで、土日も休まず頑張りました。そして、三年目までは、ほぼ毎日このような生活が続きました。年に一回程休みをとって子供に会いに行ったり、母と子供を日本に連れて来たりすることはありましたが。

三年目に入ってからやっと学会などで研究成果を発表できるようになりました。また学会等を通して、他の大学や研究機関の方々と交流することができました。さらに、他の大学や研究機関の設備を借りたり、

その方々と協力したりしながら研究を進めました。また、査読付きの論文にも取り組み始めていました。いよいよという頃に、母が体調を崩してしまいました。保育園は空きがなかったため、指導教官と相談し、一年間休学することにしました。幸い、しばらくして母の体調も回復したので、一年限りという約束で、子供の面倒を見てくれることになり、私も研究を続けることができました。

五年目には復学して、投稿論文も決まり、いよいよラストスパートとなりました。論文の作成、予備審査、論文提出、公開審査などはあっという間でした。

後輩たちへ

博士論文執筆において、私が自身の経験と反省を含めて重要と考えることは以下の点です。

- ①論文執筆の過程で、自分は一人の「研究者」であることを自覚すること。指導教官の助言、アドバイスは真摯に受け入れ、同業者とのつながりを大切にすること。
- ②研究に集中できる環境を整えること。精神面、健康面においては、周りの、特に家族の協力は重要である。
- ③諦めないこと。

私はかなり不器用で、かなり遠回りをしてきました。私の経験がどの程度参考になるかはわかりません。ただ、うまくいかないときは、このような人もいたのだと励みにして頂ければ幸いです。